史料紹介　「仁王経法」紙背「当座続歌」

源城　政好（立命館大学ＣＯＥ推進機構客員研究員）
E—MAIL　yqb02575@nifty.com

ここに紹介しようとする「当座続歌」は、醍醐寺の僧侶堅済が明徳四年（一三九三）十月中旬頃に書写した「仁王経法」の紙背である。[1]

本史料については、二〇〇四年十一月一日から十九日にかけて立命館大学アート・リサーチセンター展示室で開催した財団法人藤井永観文庫展「中世の聖教と紙背」において公開し、同時に刊行された図録に写真掲載されている。歌数は現状では一〇二首であるが、そのうち上句のみが二首、下句のみが二首あり、いづれも紙継ぎ部の欠損によるものである。それゆえ、この「当座続歌」の総歌数については一〇二首以上あったということになるが、現状では、春歌二十首・夏歌十五首・秋歌二十首・冬歌十五首・恋歌十首・雑歌二十二首の構成である。祐盛・堅済・親長の三名によって詠われているが、内訳は以下のとおりである。

祐盛　三十一首（春七・夏五・秋七・冬五・恋三・雑四）
堅済　三十六首（春六・夏五・秋八・冬五・恋三・雑九）
親長　三十三首（春七・夏五・秋五・冬五・恋四・雑七）
不明　二首（雑二）

このうち十首（1・22・53・62・67・74・80・82・84・102）について合点が施されている。

また書写の時期は、奥書に「于時嘉慶第二之天初春上旬之比民部卿阿」とあり、「仁王経法」の書写とさほどの年限の隔たりはない。書写者である民部卿阿が誰であるかということであるが、本史料の奥書に

僻案点十首

親衛　三首
戸部阿　二首
祐盛　五首

とあり、合点の施された歌数および詠者の内訳が合致する。また戸部が民部省の唐名であり、戸部阿は民部卿阿闍梨の略称であることから、戸部阿が堅済を指していることになる。堅済は、康応元年（一三八九）の醍醐寺の寺法の署名者として現れ、[2] また、永仁四年（一二九六）正月の刊記をもつ「三摩耶経般若波羅密多理趣釈」（版本）の奥書に「明徳四年十二月中旬之比、移点了、即以此点本、先年令伝受了、（梵字）資堅済」とあることから、醍醐寺の僧侶であることがわかる。[3]

つぎに、祐盛についてであるが、『御遺告釈疑鈔末余』（重要文化財　醍醐寺所蔵）の書写奥書に

文和二年壬辰六月廿五日終書写之功畢、此口決自宗秘蹟也、深可納箱底而已、一交了　　権律師祐盛春秋四十四

とあり、④また、『醍醐寺新要録』各篇に以下のごとき記載が散見することから、知恵身院の僧侶であることがわかる。

一、至徳遷座事
　結番事
記云、御仮殿本地供両所云々、毎日同タラ尼結番ス、
　供養　知恵身院法印祐盛　修禅院法印弘俊山務　慈心院法印俊盛
　光台院法印弘済　蜜教坊法印実俊　宝幢院大僧都隆宥　（巻第二「山上清滝宮篇」）

一、近代供僧等交名事
円光院供僧六口
　祐盛法印四月初辞職、同〻入寂　（巻第三「円光院篇」）

一、又号浄土坊事
隆源記云、祐盛少輔　知恵院西　又号浄土坊　（巻第五「知恵身院篇」）

一、血脈事
　道祐　祐盛知恵院法印
（朱書）「此代、参南朝、云院家、云法流、中絶」　（巻第十二「報恩院篇」）

最後に、親長についてであるが、奥書から親衛とも称することから近衛府の人物かともおもわれるが不明というほかはない。ただ貞治三年頃の「一万首作者」に「法印祐盛」とともに「法性寺三位親長」の名がみえる。⑤『尊卑分脈』・『公卿補任』によれば、親長（一三〇九～？）は室町家の庶流法性寺雅平の曾孫で、延文元年（一三五六）九月十九日従三位に叙せられ非参議となっており、同三年に正三位となり、貞治四年（一三六五）九月、五十七歳で出家している（法名観覚）。

註

① 「仁王経法」の書写歴は以下の通りである。

本批云
護摩経勤仕之間老師口伝之上此法肝心等注折紙伝受了
金輪御修法同日始行仍両法口伝一紙注承之件折紙在別可秘々々
同年同月廿一日記之　　座主権大僧都光宝

明徳四年十月中旬之比令書写了　　権律師堅済

② 『醍醐寺新要録』（巻第二十二「寺法篇」）所載

一、山上下部新造ノ住坊禁制事
定置　法度事
一、於当山之下部、不可新造住坊事
一、同下部不可入峰事
一、於衆中坊、不可有譲与沽却下部等事
右条々、一寺有評定、向後堅所被制禁之也、若於違犯之輩者、厳密可有其沙汰者也
康応元年七月七日　　隆圓記下悉在判
宗耀・隆慶・承俊・弘意・俊紹
弘秀・弘鑁・堅済・俊憲・宗仲

亮顕・顕運

（原本の署名は並記）

③「醍醐寺聖教目録」（三）」（文化庁文化財保護部美術工芸課　二〇〇〇年）所載。

なお、藤井永観文庫には醍醐清浄光院御房宛の堅済書状が蔵される。

④醍醐寺霊宝館名品解説Ⅰ「和紙に見る日本の文化―醍醐寺史料の世界」（二〇〇四年）所載。

⑤井上宗雄『中世歌壇史の研究　南北朝期』（改訂新版　明治書院　二〇〇〇年）

凡例

一、本史料は、学校法人立命館藤井永観文庫所蔵「仁王経法」紙背の「当座続歌」である。

一、巻子装で、本紙は、幅三一・〇cm　長さ六八六・二cmである。

一、「当座続歌」は第四紙から一六紙に筆写されており、長さ五八七cmである。なお、第一から第三紙および第十七紙は白紙である。

一、翻刻にあたっては、旧字体は新字体に、片仮名は平仮名に改めた。

一、改行は原状通りとした。

一、紙継ぎ部分は……で示した。ただし、錯簡があるとおもわれる場合は═══で示した。

一、虫損・摩滅等により文字が判別できないもの、および文字の欠失のうち、字数が判明するものは□で、判明しがたいものは［　］で示した。

一、歌番号は翻刻者が付した。

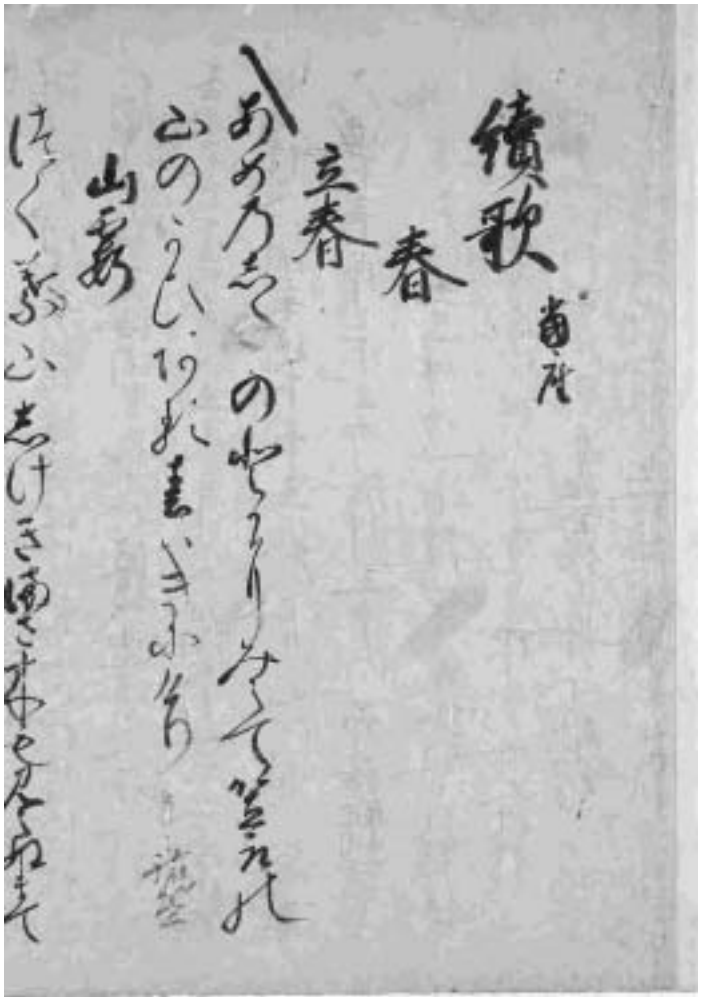

図1　「当座続歌」（巻首）

図2　「当座続歌」（奥書）

図3　「仁王経法」（巻首）

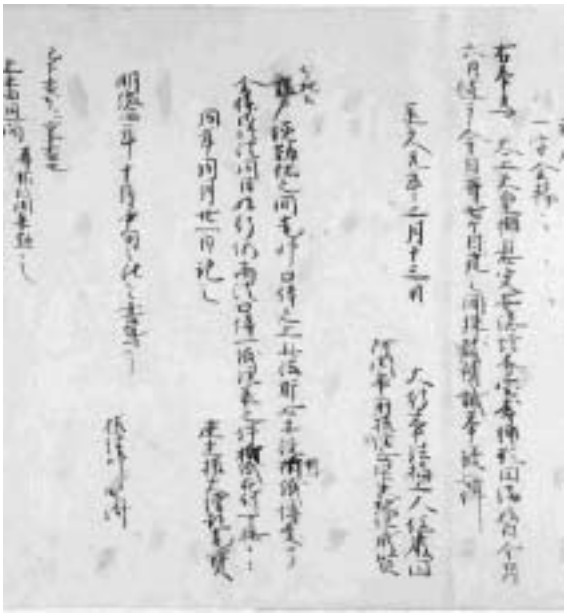

図4　「仁王経法」（奥書）

続歌　当座

春

立春

1あめのしたのとかにみえて笠取の
山のかひある春はきにけり　祐盛

山霞

2つく葉山しけきまさ木も見えぬまて
立つくしける春霞かな　堅済

浦霞

3春かすみしきつの浦のゆふなきは
浪間にみえてこく船そなき　親長

沢若菜

4きえすともこゝを雪間と我しめし
野さわの水に若菜をそつむ　祐盛

紅梅

5色よりもにほひそふかきくれなゐの
うす花染の梅のした風　祐盛

梅薫風

6木のもとはいつくなるらむ梅のはな
色こそみえねにほふ春かせ　堅済

春雪

7春ふかく成行まゝにやまさとの
雪はあさくもつもりける哉　親長

谷鶯

8山ひこのこたふるたにのうくひすは
をのれか音にやなきてあらそふ　親長

岸柳

9色なくて下行水も春くれは
きしの柳のみとりそめけり　親長

帰雁

10ふるさとの花は都のはなよりも
はやくさけはやかへる雁かね　堅済

待花

11なからへて花まちつくるいのちこそ
老ぬる身にはわきてをしけれ　祐盛

朝花

12春の夜のまたあけぬ間にさきそめて
花も人をや今朝はまちけむ　親長

夕花

13ゆふかすみたちかくせともよしの山
花はありとやにほふ春風　堅済

古寺花

14をらてたゝ花を仏にたむくるは
さくらにましる峯の古寺　祐盛

落花

15吹かせのなき世なりともいかにせむ
つもる日数にちるさくらをは　堅済

春月

16山端は霞にたえて空にのみ
いてゝそみゆる春のよの月　祐盛

春雨

17さひしさをとふ人あらは中〳〵に

なかめや春のたよりなるへき　親長
春駒
18手にかゝるものならすとも春駒の
あるくこゝろをいかてつなかん　祐盛
款冬
19木すゑまてはやさきつくせくれてゆく
春にをくるな山吹のはな　親長
暮春
20道しらはたつねてみまし年ことに
はかなくゝるゝはるのゆくへを　堅済
夏

更衣
21是も又うすくなれはやこけ衣
衣かへともいふへかるらむ　堅済
卯花
22をのつからかこひすてたる山家の
かきねも時にさける卯花　親長
遅桜
23いまも又ありけるものをおそさくら
花にのこせる春のかたみは　祐盛
暁郭公
24おほつかなをとろかぬ間にほとゝきす
いく声なきつ暁の空　親長
聞時鳥
25一声を森のこすゑに鳴すてゝ
いつちゆくらん山郭公　堅済

寝覚時鳥
26老らくのねさめのそらに鳴すてゝ
涙をのこすほとゝきす哉　祐盛
夏草
27我やとのものとはみえすことの葉の
花も色ある山となてしこ　親長
早苗
28いてゝみよ伏見の里のみたやもり
今いくかありて早苗とらまし　祐盛
五月雨

29浦人や舟なかすらんしかま河
海にいてたるさみたれの比　祐盛
瞿麦
30なみた□そ露とはむすへちりの身の
をき所なきとこ夏の花　祐盛
夏月
31待わひし心つくしをなくさむる
程なくあくるみしか夜の月　堅済
蛍
32なにゆへに身より思のあまるそと
とはゝや物を夜半の蛍に　堅済
夕立
33一村はすきぬとみえて夕たちの
跡よりやかてはるゝうき雲　堅済
納涼
34てりよはる日影もすこしゆふたちの

（六）

すくる外山は雲かくれして　親長
六月祓
35みなかみに秋や近つくみそき河
波もすゝしき音まさるなり　親長
秋
此普通ノ習也、秘説可用御作次第ヲ
立秋
36今朝よりはいつくの風も身にしみて
めにみぬ秋を空にしる哉　堅済
七夕
37めくりあふ程やはるけき天川
空行月の秋の一夜は　祐盛

七夕別
38かえさにはかちとらましやひこ星の
おもひのみこそこかれゆくらめ　親長
荻風
39きくことに露命のいつまてと
思しらるゝ荻の上風　堅済
萩露
40散はをしはらはぬ枝はあさ露に
あまりみたるゝ萩か花すり　親長
朝霧
41朝たちて誰まよふらんとをさとの
通路うつむ小野の秋霧　親長
待月
42まちわふる心つくしは木間より
もりこぬ月そ猶まさりける　祐盛
山月
43浮雲は山の端遠く晴のきて
影もさやかにすめる月哉　堅済
嶺月
44待程に夜はふけぬなり月はまた
いてつる峯に近くすめとも　親長
出月
45影うつる遠山とりのますかゝみ
光をそへて出る月哉　堅済
入月
46はこ崎や明方ちかき月かけは
浪のそこにも入ぬへきかな　親長
橋上月
47わひつゝも宇治の橋姫ひとりのみ
いく夜ねまちの月を見るらむ　祐盛
河月
48久方の中なる河にすむ月や
空にかはらぬ光なるらん　祐盛
擣衣
49をしなへて身にしむ秋の風なるに
たかためとてか衣うつらむ　堅済
野鹿
50宮き野の草葉のうゑにをく露や
妻よふ鹿の涙なるらん　堅済
杜紅葉

51よしやたゝいはての森のもみちはも
色つきけりと色にこそしれ　堅済
思紅葉
52村時雨ふるころなれやかたをかの
もりの木すゑは色つきにけり　堅済
秋夕
53身ひとつにつもれる老のあはれかと
とはゝや人の秋の夕くれ　祐盛
野虫
54秋さむき野原のむしや夜もすから
いきても草のかけになくらん　祐盛
九月盡
55明日しらぬ身をいつまてとなか月も
暮ぬる今日はおとろかれつゝ　祐盛
冬
初冬
56時雨つゝ空こそかはれにはのおもは
きのうの秋の霜かれのまゝ　親長
時雨
57さひしさはなをまされとやひとりすむ
真木のいたやに時雨ふるらん　堅済
落葉
58とひくへき人もあらしのはらはすは
落葉や庭のとさしならまし　親長
山雪
59山人のかよへる道もたえぬらし
みな白妙につもるしら雪　堅済
海辺雪
60こと浦にかよふ浜路もあとたえて
雪ふみまよふすまの海人　祐盛
行路雪
61いなり山しるしも雪にうつもれて
夕こえまよふ杉の下道　親長
冬月
62散のこる木葉かくれは冬の夜の
月も心をつくしてそみる　堅済
屋上霰
63さゆる夜はならのひろ葉に音たてゝ
そともの軒にちるあられかな　祐盛
千鳥
64清見かたかたふく月もほの〳〵と
明行空に千鳥なくなり　堅済
江寒蘆
65難波江やあしのかれ葉もそよさらに
風さむき夜は鴨そなくなる　祐盛
水鳥
66かたふかて影さえのこる月の夜は
あくるををしの音にや鳴らむ　親長
寒草
67露むすふ秋には風もかはりけり
たえ〳〵のこる霜の下荻　親長
佛名

（八）

68罪きゆる人をもらすなとなへつる
三世の仏の一心に　祐盛
歳暮
69昨日といひ今日といふまに年くれて
今夜はかりそ春をへたつる　堅済
閑居歳暮
70柴戸に我のみをしむとしのくれ
あけなは春と誰いそくらん　祐盛
恋
初恋
71色にたに出へき程もなきこひの
またき心にふかくそむらん　親長
忍恋
72あはれとも誰かはとはむわか恋を
身より外には人のしらねは　堅済
祈恋
73かく□る［　］□すいのるに神もしれ
［　］さ中〳〵に年へぬるとを　親長
［　］恋

74［　］歟それをたにせめてはゆるせあふさかや
こえしむかしの夢の関守　祐盛
恨恋
75うらみわひ又とふことときなきときや
さすかに人も思出らん　堅済
絶恋

76わくらはにとひくる人はこのまゝに
たゆともしらて猶やまたれん　親長
寄雲恋
77よそになる人のこころのうき雲や
身をしるあめのやとりなるらむ　親長
寄煙恋
78いたつらにおよはぬ富士のけふりそと
よそに見てたに身はこかれつゝ　堅済
寄虫恋
79とふほたるをのれもえてもおもひしれ
我もおもひの身にあまるとは　祐盛
寄鳥恋
80したへとも人はこぬみのはまちとり
跡なき浪にねをのみそなく　祐盛
雑
旅行
81うきことはなをこそまされたひころも

浦船
82しるへせよ友なし小船よる方も
なきさにまよふ和哥の浦風　祐盛
浦鶴
83わかのうらやむれたつたつの行末も
はるかにみゆる波上哉　親長
述懐
84かくはかりうき世中としりなから
いとはてすめる身こそつらけれ　堅済

（九）

閑居述懐
85のかれ来て深山の奥にすむ身にも
心や世をはいとはさるらむ　堅済
懐旧友
86かたりてもなくさみてよしいにしへを
みし世の友のある身なりせは　祐盛
懐旧夢
87手枕に涙はたえぬねさめかな
ありし昔の夢のうき橋　親長
尺教
88おろかなる心のほかにのりの道
なしとおもふやさとりなるらむ　堅済
尺教
89清滝やきよきなかれの法水
手にむすふよりすむ心哉　堅済
尺教
90浪たゝてにこる心の水すまは

91たちよるやとのなきにつけても　堅済
旅宿
92旅衣はる〳〵きぬるかりねにも
夢路はやすく帰る古郷　祐盛
旅泊
93舟とむる袖のみなとの友ちとり
ひとりはなかぬうきねとそしれ　親長
海路
94すまの浦や波路はるかにみわたさは
雲より船は出るなりけり　堅済
窓竹
95風ならててる日になひく影までも
すゝしさたえぬまとのくれ竹　親長
眺望
96みわたせはすえはるかなるふしみ田の
ほなみにつゝく宇治の河波　親長
山家松
97猶も又人のとふやと柴戸に
松吹風の音はかりして　堅済
山家嵐
98いたつらに峯のあらしのこえはかり
此しはの戸におとつるゝ哉　堅済
山家水
99かくて世にすめるもうしや山の井の
みつからつらき影はうつさし　親長

100〔　　〕の影は見てま□　祐盛
神祇
101行末をなをこそたのめ清滝や
きよき流のあらむかきりは　堅済
神祇
102清滝やたえぬを神のちかひとも
流をうくる人やしるらむ　親長

僻案点十首

（一〇）

親衛　三首
戸部阿　二首
祐盛　五首

于時嘉慶第二之天初春上旬之比民部卿阿

（端裏書）
「仁法　酉酉」

（一一）